

「憂鬱ガール」

湯ノ浦 ユウ

「だってあなたの世界に私はこれっぽっちも必要ないでしょう？」
放課後の教室に夕暮れのオレンジの光が充滿している。

その光に乗せて彼女の憂鬱が教室を染め上げていくようにも感じてならない。

すごく、哀しい気持ちになった。

心が弾け飛びそうになる。

彼女は眼に映るものを全てを嫌いだと思っているのかもしれないと思わせるような深い眼差しをしていた。

堀田薫がうちの高校に転校してきて一週間くらいが経とうとしていたが、僕の目から見てもクラスに溶け込んでいるようには到底思えなかった。

「私には関わりたくないほうがいいと思うよ」
息が詰まる。

「なんでそんなこと言うの？」

喉の奥に何かが挟まっているんじゃないかと自分で思うほど声
でなかった。

「だってあなたには関係ないでしょう」

その言葉と反対に僕には堀田の顔が寂しそうな表情にしか見えな
かった。そんな表情に見えたからこそ、こんな寄せ付けない態度を
取られても食い下がらずにはいられたんだ。

「私もう帰るわね」

素っ気ない彼女の振る舞いに心が折れそうになったが、やっぱり
僕は諦めがつかず、僕は堀田の後を追いかけた。

堀田と僕の家は近所で帰り道は殆ど同じだったことが堀田の運の
つきだった。

「あー、神様がいるなら呪ってやりたいわ」

不機嫌そうに僕の隣に座る堀田はつぶやく。

電車で揺られ始めてから十分程、やっと口を開いてくれた。棘の
ある言葉だったが、それだけで嬉しかった。

「そんなこと言うなよ」

「だって引つ越し先から学校までの道のりをこんなに憂鬱にさせるんだから堪ったものじゃないわ」

「だからそんなこと言うなって」

「あんたが迷惑の原因なんだってば」

力強く前屈みになって食い入るように言い放たれてしまった。

「そっか」

僕は素っ気なく答えた。少しだけきつきの仕返しのつもりだったものもある。

「何なのよ、何で付き纏うわけ？」

「クラスみんなにどうしてあんな態度とってるのか気になって」

「別に私の勝手じゃない。心配される覚えもないけど」

堀田は更に口調に強みを増していった。

「で？付き纏うのやめてくれるわけ？」

「うーん、やめたくはないかなー」

呑気に答える僕に綺麗な右ストレートが飛んでくる。流石にこればかりは反省した。

ヒリヒリとする頬を抑えながら僕は、

「ごめん、ごめん。でも堀田さんから直接理由聞きたくて」

「あんな、優しきっていうかそれ押しつけだから」

堀田さんが半ば呆れたような表情をしたので、

「……？押しつけてるけど、なんか駄目なの……？」

なんて言ったら諦めた顔に変っていった。

「あんたのそれ病気だわ……。もういいや、話すよ」

電車の音に掻き消されそう声でつぶやいた。こんな声を聞くのは初めてのことだった。

彼女の言葉のすぐ後に目的の駅に着き、会話もないまま僕らは肩を揃えて歩いた。

電車から降りた外は夕焼けも沈み、夕闇が広がっている途中の空に変わっていくところだった。

「私、半年後にはまた引越すのよ」

空を見上げていた僕に唐突に言葉が飛んできた。

「これまでもずっと転校が多かったからさ、友達作って仲良くなるほうがもつたない気になっちゃってるんだ。それに今回ははつきりここにいられる期間も分かっちゃってるから余計にね」

彼女はそういうと笑つて見せた。

彼女から流れてくる言葉を受け止めきれることが僕にできていたんだらうか。

その言葉を聞きながら見上げる空は彼女の憂鬱に染め上げられていくみたいだった。

堀田さんの言葉にしっかりとした返事が出来ていたかも覚えていない。

本当に優しさでも何でもない自分のエゴを押しつけただけだった。その日は何も考えられないまま別れた。

でも結局僕に何かができるわけでもなく、それからも普通に一緒に帰ったり、今までどおりに付き纏うことぐらいしかできなかった。

転校の話も特に触れることもなく過ぎていった。そして堀田さんは宣言していた半年間を大きく上回る三カ月間で

いなくなつてしまった。誰にも何も言わず、何処かに行つてしまった。

彼女の転校を知つた帰り道、町が彼女の憂鬱に彩られているように感じた。きっと僕だけだらう。

夢の中にいるみたいに気持ちか浮ついて何も手につかなくなって、
幻でも見ているみたいだった。

彼女の記憶の中に僕はこれからどれくらい居続けることができる
んだろう。

そんなことばかり考えた。

難しいことなんか全部忘れて、もう一回彼女と話したいことだけ
はわかっていた。

クラスのみんなは最初から誰もいなかったみたいにしていて、僕
は辛いかかそんなんじゃないやなくてすり抜けていくような気持ちになっ
た。

それからまた半年ぐらい経ってから、驚くことに堀田さんから僕
宛に手紙が届いた。

どんなことが書かれているのか、期待と少しの緊張を持って手紙
を開くと、

「あんたのお陰でバンド始めました」、だつてさ。

何か馬鹿らしい写真が付いてきて面白かった。

手紙の文面もすごく憂鬱そうな彼女らしい文面で、何だかすごく

笑えてきた。
